

# アーネスト・ヘミングウェイの *To Have and Have Not* と最近の批評

日 影 尚 之

## 1. はじめに——*To Have and Have Not* 概要とその従来の評価

アーネスト・ヘミングウェイの小説 *To Have and Have Not* (1937) は、とりあえず以下のように要約されるであろう。メイン・プロットは、1930年代前半、大恐慌時代のキー・ウェストおよびキューバ(ハバナ)そしてその海域を舞台に、「持たざる者」である主人公、すなわち漁船船長 Harry Morgan (43歳)らの経済的困窮、すさんだ社会状況、彼の不法活動(密出国幫助、酒密輸など)および彼の死亡(銀行強盗をして逃げてきたキューバ革命家4人を船でキューバまで運ぶ途上の銃撃戦にて)までを描く、酒と裏切りと暴力に満ちた、暗い小説。Harry を主人公としたこうした要約に付け加えるべきサブ・プロットとしては、退廃的生活を送る富裕層および“健全で幸福な”生活を送るブルジョア層(持つ者たち=haves)が「持たざる者」たちとはまるで無関係であるかのように生きている(すれちがう)様を描く。サブ・プロットでは特に作家 Richard Gordon が重要な位置を占めている。

アンバランスな三部構成 (Part One: Harry Morgan Spring, Part Two: Harry Morgan Fall, Part Three: Harry Morgan Winter) については、その理由として、執筆経緯が指摘されている。また、様々な語りスタイルも特異な点として指摘されている。Part One は Harry の一人称語り、Part Two は三人称語り、最も長い Part Three は Chapter 9 “Albert [Tracy] Speaking,” Chapter 10 “Harry,” Chapter 11~26 は大まかには三人称語りだが、その中に Marie の内的独白

(Chapter 12, Chapter 26)、Richard Gordon の意識の流れ的フラッシュバック (Chapter 21)、Dorothy Hollis の内的独白(Chapter 14)なども含まれる。こうした語り的手法は次の大作 *For Whom the Bell Tolls* につながる実験的意味はあっても、この *To Have and Have Not* 自体の手法は失敗というのが大方の評価である。

内容的にも、一般的評価は高いとは言えない。大恐慌時代の経済的弱者の苦悩を描く社会派小説にしては Harry ら「持たざる者」たちは身勝手であったり、暴力的であったりして非英雄的だし、何事に関しても他人を信用することは危険であり、自分一人でやるとうスタンスの Harry が、死に際に、人間一人では無力だと言う台詞もいかにも唐突な印象が残る。例えば、同時代のジョン・スタインベックの代表作 *The Grapes of Wrath* (1939) において、主要登場人物たちが“from I to we”という社会的弱者の団結にしたいに目覚めていく過程が巧みに描かれているのとは対照的である。このように *To Have and Have Not* を積極的に評価することはなかなか困難ではある。

## 2. 新しい批評(1)—女性の心理描写、海賊ロマンス、「男らしさ」、殺伐とした社会情勢など

しかし、この小説を評価しようとする試みがないわけではない。例えば Lawrence R. Bower と Gloria Holland 編 *Hemingway and Women: Female Critics and the Female Voice* (Tuscaloosa: U of Alabama P, 2002) には Kim Moreland の論文 “To Have and Hold Not: Marie Morgan, Helen Gordon, and Dorothy Hollis” が入っている。<sup>1</sup> Moreland は Harry Morgan ら男性登場人物ではなく、表題にもある3人の女性たち——Harryの妻 Marie、作家 Richard Gordon の妻 Helen、ハリウッドの映画監督 John Hollis の妻 Dorothy——が重要だとしてこの3人に注目する。3人の状況はそれぞれ異なるものの、(夫の死亡、裏切り/離婚、無関心などの理由で)結局は夫の不在に直面する。前にも述べたように、Marie と Dorothy は心理を赤裸々に吐露する「内的独白」でその心理が描かれ、Helen については長い台詞でその心の痛みを表現している。Harry の場合、不況や漁船および片腕の喪失は、男性登場人物の「男らしさ」の危機であり、「家族のため」と言って/考えて危険な行為も辞さないのは、実は「家族のため」というよりは自分の「男らしさ」を証明するためである。こうした点は男性中心の筋書きで、ヘミングウェイらしい(人間としての女性の軽視)ところでは

あるが、それにしても、上の3人の女性は、ヘミングウェイの描く女性としては、心理が豊かに描かれ読者も共感できる人物になっている、と Moreland は指摘している。

また、Kirk Curnutt と Gail D. Sinclair 編著の *Key West Hemingway: A Reassessment* (Gainesville: UP of Florida, 2009) には、*To Have and Have Not* に関する比較的新しい批評が数編収められている。批評内容がすべて真新しいかどうかは別として、いくつか紹介する。例えば、Susan F. Beegel は “Harry and the Pirates: The Romance and Reality of Piracy in Hemingway’s *To Have and Have Not*” の中で、この地域の海賊文化がヘミングウェイに作品のインスピレーションを与えたと述べる。<sup>2</sup> 一方で写実的な暴力描写をしながらも、主人公の名前や片腕を失う点など、海賊ロマンスの伝統を借用しているとして、*Treasure Island* の Long John Silver、*Peter Pan* の Captain Hook、Gilbert and Sullivan の喜劇オペラ *The Pirates of Penzance* (1879) などの作品名や登場人物名が例示されている。

Harry Morgan と妻 Marie は17世紀の英国大海賊 Sir Henry Morgan とその妻 Mary Elizabeth Morgan のイメージであり、社会的弱者としての売春婦に対する共感、逆に裕福な者に対する反感などもロマンスの要素である。

また、Harry の外見は、映画 *Captain Blood* (1935) の冒険家/主人公を演じた俳優 Errol Flynn のイメージから影響を受けている面があるとも考えられるものの、Harry は決してロマンチックな Captain Blood ではないこと。また、労働運動家の系譜として 実在の Joe Hill や *The Grapes of Wrath* の登場人物 Tom Joad を想起するかもしれないが、*To Have and Have Not* が決して左翼のプロパガンダではなく、革命家たちの情熱的暴力を非難し、革命のためという暴力の偽善をあばいていることなども指摘されている。

また、Susan J. Wolfe は、“‘The Poor Are Different from You and Me’: Masculinity and Class in *To Have and Have Not*” で、富裕層の「男らしさ」の欠如を非難するヘミングウェイの傾向がこの作品で際立つ点を具体的に指摘する。<sup>3</sup> それは経済的に豊かな人物たちが、主人公 Harry の力強さ、勇敢さ、忍耐強さなどの対照をなすことによって示される。まずは Harry を経済的に追いつめることになる Mr. Johnson である。Harry の船を釣り船として3週間チャーターしたが、釣り技術の未熟さや力強さの欠如から釣り道具を消失させて損害を与えておきながら、チャーター代および道具弁償代の 800 ドル以上を踏み倒

して消えるずるい人物である。Harry の方はしかし、そんな観光客をやすやすと信用した自分が愚かだったと反省するのである。次に、富裕なアジア人 Mr. Sing である。中国人の不法移民をアメリカに運ぶ仕事をさせる Sing はこぎれいな服装をし、イギリス人のような話し方をするが、自分の手を汚すことなく金の方で別の人間に荒い仕事(暴力行為)を実行させるずるさを持つこと、などが指摘される。

小説の Part Two では上流階級の男＝不道德の例として、まず政府役人の Frederick Harrison が作者の攻撃の対象である。合衆国で最重要な3人の中の1人とされる Harrison は、強者が法律を作り、その法によって経済的弱者を支配する卑怯さの象徴でもある。この Harrison は、Key West 経済を救済したとされる、連邦フロリダ緊急救済局長 Julius F. Stone Jr. の風刺的描写である。ヘミングウェイはホワイトヘッド通り 907 をリゾートに変えてしまったことに怒りを感じていた。ローズベルト大統領特命の Harrison は、法律を犯す密輸者として Harry を逮捕しようとするが、家族を食べさせるためにやむを得ず法を犯す Harry らに共感する Willie 船長は Harrison の言うことには従わずに、Harry が逮捕されないよう協力する。さらに Harrison に対して Willie 船長は、あんたたちはわれわれ労働者階級の食べ物の値段をつりあげてる一味じゃないのか、と訴えるのである。

さらに、Steve Paul は“Tropical Iceberg: Cuban Turmoil in the 1930s and Hemingway's *To Have and Have Not*”の中で、この暗い小説はヘミングウェイが生前発表した小説で唯一アメリカを舞台にしていること、登場人物たちはキューバの暴力的で激しい政治的混乱に翻弄されながら、全米の荒涼とした経済的変動に苛まれており、革命運動に対する作者の考え方の手がかりを与えらるゝとして、以下のように述べる。<sup>4</sup> ヘミングウェイが作品内で語っていないことにも目を向ける必要がある。1933年5月ヘミングウェイは写真家ウォーカー・エヴァンズと共にキューバで3週間をすごすが、それはキューバの当時の独裁者ジェラルド・マチャードに反対していたからだ、というヘミングウェイの1952年の文章は、必ずしも字義通り受け取るべきではない。ヘミングウェイとキューバの関係は1928年当時の新妻 Pauline とパリからアメリカのキー・ウェストに帰る途中、初めてハバナに足を踏み入れたことに始まるが、それ以来、深海漁業に入れ込んだヘミングウェイはキー・ウェストから近いキューバを頻りに訪れるようになった。1932年と1933年のハバナでの

長い滞在期間に、彼は反政府勢力の暴力的活動や独裁者マチャードの容赦ない抑圧政策を目の当たりにすることになった。たしかに、秘密警察および武装部隊が市民の会合を徹底的に取り締まり、家庭であろうが会社であろうがいきなり入り込んできて、容疑者を逮捕する。逮捕された市民は軍法裁判にかけられて刑務所に送られたり、音信不通になったり、拷問の後射殺された遺体が通りで見つかったりなど、当時のキューバの殺伐とした様子を当時の記事が生々しく語っている。

*Key West Hemingway*には、この他にもハワード・ホークス監督の映画 *To Have and Have Not* (1944)と原作との関係についての Mimi Reisel Gladstein の実証的な論文なども入っているが、ここではその紹介は割愛する。

### 3. 新しい批評(2)——反権力、「セルフ・メイド・マン」、ヘミングウェイ祭

同じく *Key West Hemingway* に収められている James H. Meredith の “Hemingway’s Key West Band of Brothers: The World War I Veterans in ‘Who Murdered the Vets?’ and *To Have and Have Not*”<sup>5</sup> および今村楯夫編『アーネスト・ヘミングウェイの文学』(ミネルヴァ書房、2006年)所収の宮本陽一郎の「ヘミングウェイの南西共和国——文学、革命、観光」<sup>6</sup> から学ぶ重要な点の1つは、中央＝連邦政府に対するヘミングウェイの反感・不信感である。大恐慌によって失業した第一次世界大戦の退役軍人たちの大群(ボーナス遠征軍)が、1932年、20年間据え置き年金資格について、即金での全額支給を政府に要求して連邦議会やホワイトハウスを取り巻いた。上院はその要求を拒否し、やがて政府が動員した警官隊と抵抗する退役軍人らとの間で乱闘となり、死者や多数の怪我人が出る事件となった。連邦軍を率いるダグラス・マッカーサー将軍も動員され、ワシントンの一角アナコスチア地区でも退役軍人らの立てこもった掘立て小屋が取り壊された。アナコスチア、つまりワシントンから退役軍人を追い払い、辺境の地キー・ウェスト(観光化のため)の公共事業のために連れてきた点は *To Have and Have Not* 中で労働運動家の Jack Nelson が Richard Gordon に語るせりふにもある(22章)。宮本は、三部構成で主人公 Harry の凋落を記録する *To Have and Have Not* は、キー・ウェストの盛衰の歴史を想起せずに読むことが難しく、キー・ウェストの観光地化が始まるのは、この凋落のどん底状態に対する、合衆国の国家権力の大き

介入によってである、と述べる。

以上のような批評に加えて、また関連して、さらに興味深いのは、*Key West Hemingway* の最後に収められた Russ Pottle の論文 “Key West as Carnival: Hemingway and the Commodification of Celebrity” である。<sup>7</sup> キー・ウェストの政治的・文化的・経済的アイデンティティのあいまいさについて宮本陽一郎と似た指摘をした上で、アイデンティティの不安定性は、2人目の妻 Pauline Pfeiffer と結婚してキー・ウェストでの邸宅暮らし始めたヘミングウェイにとって、意識的にも無意識的にも重要な問題だった、と指摘する。それはアメリカ人(男性)の「セルフメイド・マン(自立した男)」と金の関係である。当時のヘミングウェイが Whitehead Street の邸宅で経済的にも安定して暮らし、アフリカ旅行をしたり、じっくり執筆できたりしたのは、妻 Pauline の家からの経済的援助があったからで、「自立」した作家としてのアイデンティティを維持するには、こうした妻の家族への外的・経済的「依存」を自己創造の神話に変換する必要があったはずだ、と言う。もはや若者とはいえない年齢のヘミングウェイは、最初の妻 Hadley Richardson およびパリ時代を過ぎて、Pfeiffer 家の援助のもと再出発しようとしていた。1930年代、つまりキー・ウェスト時代のヘミングウェイが執筆の合間の時間をスポーツなど「男らしさ」の証明のようなことで埋めたり、気分不安さが目立ったりしたのも、Pfeiffer 家の財布のひもに縛られていることに対する不満/不安の表われとして解釈する。

しかも、「セルフ・メイド・マン」のジレンマは自己創造が成功したとしても終わらない。自己創造に成功し、そこにとどまって受け身でいるだけでは、自己を創造することにこそアイデンティティを見いだす「セルフ・メイド・マン」はアイデンティティを見失ってしまう。「男らしい」自己創造の神話は再出発しなければその源泉を身につけることはできない。

キー・ウェスト時代のヘミングウェイについてのもう1つの指摘は、私的ヘミングウェイと公的ヘミングウェイ、精神と肉体である。有名人/公人としてのヘミングウェイはメディアのニュースの金になるネタであり、いわば彼の作品が彼の行動に注目を向けさせるというよりは、彼の行動が彼の作品に注目を向けさせる状態である。ヘミングウェイの *Death in the Afternoon*(1932) に対する批判的批評——文学的力量と男としての肉体的力の関連を連想させかねない——を書いた Max Eastman との激しい口論(および肉体的けんか)のエピソードは、真偽のほどは定かでないにしても、当時のヘミングウェイに

とって、すでに、彼の作品が彼の肉体と深く結びついていたことを表している。必ずしもメディアのせいだけではないこの傾向は、ますますフェティシズムに駆り立てられるヘミングウェイの晩年に一層表われるとしても、キー・ウェスト時代にもその兆候は表われていた。知性の男としての作家ヘミングウェイと肉体の男としての有名人ヘミングウェイの区別を何とか維持しようとする苦闘は結局不可能だった。

様々な意味で、キー・ウェスト時代のヘミングウェイが残したものは、対立/緊張と矛盾つまり、彼のアイデンティティに関する疑問の連続であった。そのような矛盾の表われとして Pottle は、ヘミングウェイ祭のイベントに2つの相反するような傾向があることを指摘する。一つはマッチョで奔放な“肉体派”のイメージを遊ぶもの(例えば、ヘミングウェイの肖像の入ったTシャツや Sloppy Joe バーで開かれるヘミングウェイのそっくりさんコンテストなどで、もう一方は知的な作家としてのヘミングウェイの業績を讃えるワークショップや会議などである。前者がどんちゃん騒ぎとすれば、後者はちょっと堅い学者の会議という感じになる。だが、前者がヘミングウェイのイメージを弄ぶ商業主義でけしからん、などと言うのは当たらない、と Pottle は言う。

結局この対立/緊張関係は、公式文化(official culture)と非公式文化(unofficial culture)の問題だと述べ、 Mikhail Bakhtin のカーニバル論を援用する。一定のものを絶対化する公式文化の独善性に対して、もっと自由で変化を許容する民衆文化としてのパロディ。毎回新しい優勝者を選び直すヘミングウェイのそっくりさんコンテストは、文学的功績のみがヘミングウェイの唯一絶対の遺産だとして顕彰しようとする公的権威に対する、カーニバル的庶民文化による疑問提示でもある、ということである。無論このどちらか一方が良い悪いということではなく、両方がバランスを保つべきであり、それはヘミングウェイ自身が自分のアイデンティティを問い、そのバランスに苦闘したことを思い出す重要な方法である、と指摘する。

## 注

1. *Hemingway and Women*, pp. 81-92.
2. *Key West Hemingway*, pp. 107-128.

3. *Key West Hemingway*, pp. 158-171.
4. *Key West Hemingway*, pp. 129-142.
5. *Key West Hemingway*, pp. 241-266.
6. 今村楯夫 編『アーネスト・ヘミングウェイの文学』（ミネルヴァ書房, 2006年), pp. 31-45.
7. *Key West Hemingway*, pp. 285-298.

## 参考文献

- Baker, Carlos. *Hemingway: The Writer as Artist*. Fourth Edition. Princeton: Princeton UP, 1972.
- Broer, Lawrence R. , & Gloria Holland, eds. *Hemingway and Women: Female Critics and the Female Voice*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 2002.
- Curnutt, Kirk, & Gail. D. Sinclair, eds. *Key West Hemingway: A Reassessment*. Gainesville, FL: UP of Florida, 2009.
- Hemingway, Ernest. *To Have and Have Not*. New York: Scribner, 1937.
- Hovey, Richard B. *Hemingway: The Inward Terrain*. Seattle: U of Washington P, 1968.
- Mandel, Miriam B. *Reading Hemingway: The Facts in the Fictions*. Metuchen, N.J.: Scarecrow P, 1995.
- McIver, Stuart B. *Hemingway's Key West*. Second Ed. Sarasota, FL: Pineapple P, 2002.
- Wylder, Delbert E. *Hemingway's Heroes*. Albuquerque: U of Mexico P, 1969.
- 今村楯夫 編『アーネスト・ヘミングウェイの文学』 ミネルヴァ書房, 2006年.
- 木村靖二・柴 宣弘・長沼秀世 世界の歴史 26 『世界大戦と現代文化の開幕』 中央公論社, 1997年.
- 佐伯彰一 編 20世紀英米文学案内 15『ヘミングウェイ』 研究社, 1966年.
- 日本ヘミングウェイ協会 編『ヘミングウェイを横断する——テキストの変貌』 本の友社, 1999年.